特集

春の流鏑馬（やぶさめ）

いとけない幼子が
主役を務める春の流鏑馬――。
勇壮な秋の流鏑馬とは
趣のことなる
和やかな祭りには、
子どもの健やかな
成長を願う
深い愛情が込められている。

平成21年春の流鏑馬　乗り子　髙畠奨真（たかばたけしょうま）くん（小田谷）

幼子の成長を祈願して―

幼い子どもが主役

春の麗らかな日差しのなか、白・紫・赤の三色で飾り立てられた花笠と赤い陣羽織で盛装した幼い乗り子が出雲伊波比神社を訪れる。春の流鏑馬の風景である。

毛呂山町における代表的な祭りである流鏑馬祭りには、毎年11月3日に行われる秋の流鏑馬と3月の第2日曜日に行われる春の流鏑馬がある。

若武者姿の乗り子が疾風のごとく駆け抜け、馬上から矢を放つ勇壮な秋の流鏑馬に対し、春の流鏑馬は7歳前の男児が乗り子となり「願的」という静止している馬上から的に矢を射る行事のみが行われる穏やかな流鏑馬である。

1日限りの祭り

春の流鏑馬は、1日限りの祭りである。乗り子、当番行事人、後見、矢取り、口取り、乗り子の父親で構成された一行は、的宿を出発し、出雲伊波比神社へと向かう。その後口すすぎ、爪切りを行い、鳥居の前で神官のお祓いを受け、馬場へと入る。馬場入りした後は、二度の馬見せを行い、三度目に「願的」に矢を放つ。そして乗り子は父親と拝殿に行き、再度お祓いをしてもらい的宿へと引き返していく。このように一連の祭礼の手順は秋の流鏑馬と似ている。

しかしながら、このような一連の祭礼手順が、1日で行われているところが秋の流鏑馬とは大きく異なる点である。

「オカイドリ」に守られて

春の流鏑馬のもう一つの特徴は、的宿と神社までの往復、馬場内において乗り子の頭上に常に「オカイドリ」と呼ばれる竹に掛けられた小袖が随行するところにある。

「オカイドリ」は、母親の象徴とされ、幼い乗り子を見守り、付き従っているとされている。

「願的」、矢を射るのはこの１回のみ。

母親の象徴「オカイドリ」

「七つうちは神の子」

春の流鏑馬の主役を務めるのは7歳前の男の子。

これは春の流鏑馬が年占や豊凶判断といった神意をはかる目的で行われるものであるため「七つうちは神の子」とされる子どもを射手にすることにより、その結果をより神意に近づけようとする意図が見うけられる。このような習慣はある意味で子どもが成長する過程での通過儀礼であり、子どもの成長祈願でもあるといえる。

そこで、以前に春の流鏑馬の乗り子を務めた子どもと今年の春の流鏑馬で乗り子に選ばれた子どもに焦点をあて、当時どのように感じていたのか、また今どのような心持ちでいるのかなどをその父親に聞きました。

「いざ出陣！」（平成17年春の流鏑馬）

「お父さん、矢取りさんといっしょに」
（平成17年春の流鏑馬）

写真提供　稲垣博也さん

平成17年春の流鏑馬の乗り子
稲垣結平くん（8歳）
父　稲垣博也さん（毛呂本郷）

「息子が春の乗り子をしてから、もう5年も経つんですね」と博也さんは懐かしそうに振り返る。当時まだ3歳であった結平くんが乗り子をすることに多少の不安があったという。「馬に乗れるかが心配でした。乗り子に選ばれる前に息子を馬に乗せてみたのですが、馬を怖がってしまって、乗ることができなかったんですよ」。しかし、父親の心配も杞憂に終わった。当日は、いざ馬に乗せるとあっさりと乗ることができ、堂々と乗り子を務め、立派に大役を果たした。

「秋の流鏑馬の乗り子もしたい」と語る結平くんと父親の博也さん

乗り子に選ばれて

春の流鏑馬の乗り子ができる機会は当番区の関係で3年に1回である。「選ばれるかどうか分からなかったので、選ばれたときは本当に嬉しかったですね」と語る博也さん。結平くんが乗り子に選ばれたことに反対する人は誰もなく、親戚などから「よかったね」と祝福されたという。このことは、流鏑馬が地域に根付き、その乗り子を務めるということが「名誉」なことだという証ともいえる。「乗り子を務めたことは息子にとっていい思い出になったと思いますよ」と温かい目で結平くんを見つめる博也さんの眼差しに脇で結平くん

が少し照れくさそうに微笑んでいる。

秋も乗り子に！

今、結平くんは弟と流鏑馬ごっこをしている。口取りや矢を射る真似をしているそうだ。「将来は秋の流鏑馬の乗り子になりたいな」。結平くんのなかに乗り子に対する意識が芽生え始めているようだ。「息子にはこれからも地元の色いろな行事に参加をしてもらいたいですね。できれば将来家業を継いでもらって、商店街や地元を盛り上げてほしいと思っています。そして、町の発展に貢献できる人になってもらいたいです」と父親としての素直な希望を語る。

健康で丈夫な子に

「息子には健康で病気にかからない丈夫な体に育ってほしいと思います」。子どもの成長祈願の意味をもつ春の流鏑馬は、親から子に対する願いでもある。現在、博也さんは「流鏑馬を守る会」に入っており、祭具作りなどをしている。「これからも流鏑馬に携わっていきたいと考えていますが、できれば息子と一緒にできるようになると嬉しいですね」と笑顔で語ってくれた。

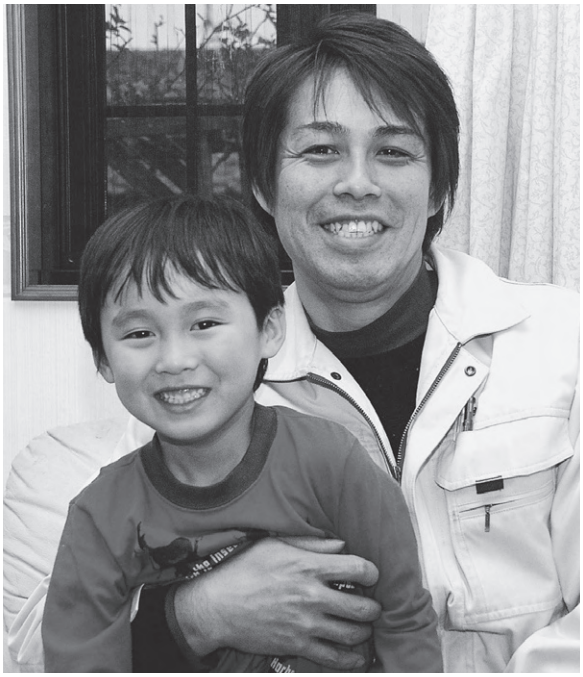
平成22年春の流鏑馬の乗り子

金子純平くん（5歳）
父　金子浩一朗さん（前久保）

「希望はしていたのですが、選ばれるとは思っていなかったので、驚いています。今になってやっと嬉しさが沸いてきました。流鏑馬の乗り子は乗りたくてもなかなか乗れるものではないですから」。そう語る浩一朗さんも秋の流鏑馬の乗り子をした経験があった。

「ぼく頑張るよ！」

純平くんは人見知りもなく、明るく元気な男の子である。浩一朗さん曰く「ちょっと弱虫なところがあるけれどやるときはやってくれる子だと信じています。でも、まだ5歳なので道中飽きてしまわなければいいのですが―」やはり親としての心配もある。それでも純平くん自身は「ぼく、頑張るよ！だって、お馬さんのことも好きだしね」と目を輝かせた。「お友だちがたくさん見に来てくれると嬉しいな」と実に頼もしい。そんな純平くんに目をやりながら「自分の子どもが乗り子をするときに流鏑馬に携わることができるなんて、とても幸せなことです。本当に関係者の皆さんに感謝しているんです」と浩一朗さんは語る。家族や親類も喜んでくれており、知り合いなどに嬉しそうに乗り子になることを話してくれているという。



「頑張る！」と力強く話してくれた純平くんと父親の浩一朗さん

後見の立場と親の立場

現在、浩一朗さんは前久保で流鏑馬を執行する側の後見という役に就いている。「いつも流鏑馬では、お子さんを乗り子にしてくれる親御さんに心配をかけないように細心の注意を払って執り行っていたのですが、今年は自分が親の立場になるので複雑な心境なんです」と今の胸の内を語ってくれた。しかし役員一同は、浩一朗さんが後見も兼ねることを認めてくれた。「口取りなど皆、知っている顔ぶればかりなので安心して子どもを任せられるんですよ」と嬉しそうに語ってくれた。

伝統文化の継承を！

「今は、子どもがお祭りなどを体験することが難しくなっています。息子には地元の伝統ある祭りに子どもとして参加することで何かを感じ、成長してもらいたいと考えています」と温かい眼差しで純平くんを見つめる。「これからも流鏑馬に携わり、続けていくことでこの伝統文化を残していきたい」と流鏑馬について熱く語る浩一朗さんも「息子には元気に素直に丈夫に育ってもらいたいですね」と純平くんのことを語るときは、優しい親の目になる。

春の流鏑馬秘話

春の流鏑馬と獅子舞

斉藤孝治さん（長瀬）

現在毛呂山町では、滝ノ入、大類、葛貫、川角の各地区の神社で、毎年秋に獅子舞が奉納されている。かつては町内の8か所で行われていた獅子舞も現在では4か所のみである。

獅子舞の記憶

「もう随分と昔のことになるのであまり詳しくは覚えていないのですが―」と前置きの後に斉藤さんは語り始めた。「昭和26年ごろであったかと思いますが、ささら獅子舞を春の流鏑馬のときに奉納しました。そのとき私は、中獅子で上演したことを記憶しています」。斉藤さんは、記憶を辿りながら話を続けた。「獅子舞は、指導がとても厳しく、教えてもらうほうも真剣に取り組まないと、とても覚えることなどできませんでした」。懐かしそうにそのころの様子を語ってくれた。

流鏑馬の付祭り

明治12年（1879）の「八幡社例祭ノ節　流鏑馬獅子舞執行ニ付約定書」（平山家文書三一二四、県立文書館委託）に、八幡宮の例祭において流鏑馬と併せて、氏子である五つの村で順番に獅子舞を行う旨の記述をみることができる。このことにより、出雲伊波比神社の春の流鏑馬において、明治12年には獅子舞が奉納されていたことがわかる。

獅子舞は以前、流鏑馬祭りの付祭りとして奉納されていたと思われる。その後付祭りは、獅子舞ではなく神楽やお囃子になったと考えられているが、獅子舞の起源については、今のところ詳しいことはわかっていない。

出雲伊波比神社蔵の獅子頭

また、出雲伊波比神社には古くから獅子頭が所蔵されている。獅子頭の入っている箱には、表に「鎮守八幡大神　禮祭道具　七ヶ村　惣氏子中　明治五年　壬申八月日」との記述があり、この獅子頭が明治5年に当時の氏子であった七か村から寄進されたことがわかる。

獅子舞の経験者

「当時獅子舞に使用した獅子頭は通常のものより重たくて、大変だったことを記憶しています。若くないと、とてもできませんでしたね」と斉藤さんは笑いながら当時のことを振り返った。確かに出雲伊波比神社所蔵の獅子頭は重厚な作りである。斉藤さんが当時使用した獅子頭は出雲伊波比神社蔵のものであったのではないかと推測される。

「普段とは違う場所で獅子舞を行ったので、緊張したけれど、夢中で舞った記憶があります」。そう語る斉藤さんは、今となっては貴重な春の流鏑馬における獅子舞の経験者のひとりであるといえる。

出雲伊波比神社に伝わる「獅子頭」
（出雲伊波比神社蔵）

春の流鏑馬と木村家

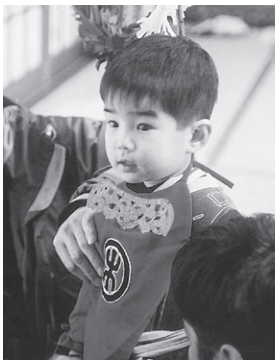
渡辺幸子さん（毛呂本郷）

春の流鏑馬で乗り子が使用する陣羽織と胸懸、矢取りが使用する半天には木村家の紋がついている。

木村家は代々毛呂氏に仕え、毛呂氏居城の大手門の東側に居宅を構えていたことから屋号が「大手東」と呼ばれ、その後「大東」と呼ばれるようになったという。

木村豊三郎さん

豊三郎さんは渡辺さんの曽祖父にあたる人である。慶応から明治期にかけ豊三郎さんは、地元である岩井でも有数の名家で広大な土地を持っていたといわれている。「曽祖父は、世話好きとして有名で、頼まれると断われない性格であったと聞いています。村のこと、とくに流鏑馬に対しても一生懸命取り組む人でもあったそうですよ」と渡辺さんは少し懐かしそうに語り始めた。「確かに春の流鏑馬で使われている陣羽織や胸懸などに入っている紋は木村家のものですね。曽祖父は、流鏑馬に対しても熱心であったので、木村家で陣羽織や胸懸、半天を奉納したのではないかと思います」と渡辺さんは教えてくれた。渡辺さんが幼少のころ母親に連れられて、春の流鏑馬を見学に行ったとき「あの家紋はうちのもので、あの陣羽織はうちで奉納したものなのよ」と話してくれたという。



木村家の紋の入った胸懸
（写真提供　稲垣博也さん）

「オカイドリ」

「打掛」を別名「掻取」という。打掛は裾が長いので、廊下などを歩くときは両褄を掻い取って引き上げるので掻取ともいわれた。春の流鏑馬で「オカイドリ」がいつからあらわれたのかは不明であるが、女性、とくに母親を表していると伝承されている。また、古い「オカイドリ」の内側に「大正十三年二月廿一日奉納古式流鏑馬小袖　入間郡毛呂村大字岩井　寄付者　木村すけ子」と記されている。

木村すけ子さんについて、渡辺さんは次のように語ってくれた。「木村すけ子は、私の伯母にあたります。しかし伯母は私が幼少のころ逝去したので伯母に対する記憶やその当時の記録は残っていないのです。実のところ本当に伯母が奉納したのかどうかは定かではないのです」。しかしながら大正期以降、春の流鏑馬において「オカイドリ」が使用されていることは事実である。

先祖は誇りです

「今でも陣羽織などに家紋が使われていることは、素晴らしいことですし、先祖のことは誇りに思っています。ただ会ったことのない曽祖父の話なので、物語でも聞いているような不思議な感覚です」と今の気持ちを語ってくれた。「春の流鏑馬が毎年続けられていることは、本当にありがたいことに思います。今年は久しぶりに見に行ってみたいと思います」と渡辺さんは笑顔で語ってくれた。

「オカイドリ」と呼ばれる小袖
（資料提供　出雲伊波比神社やぶさめ保存会）

春の流鏑馬縁起

出雲伊波比神社第25代宮司　紫藤正臣さん

宮司という職について

「昭和55年に奉職して以来、氏子の皆さんに支えられ務めさせていただいております。現在は、出雲伊波比神社のほか町内の9社を奉務しています。平成11年に宮司に就任してからは、関東以北において最古の神社建造物であり、町内唯一の国指定重要文化財である本殿を中心とする由緒ある神社を守ることに細心の注意を払って務めています」。静かな語り口で紫藤宮司は話し始めた。

「宮司をしていますとお祭りや年末年始が季節的に忙しいので大変ではありますが、初詣など多くの皆さんが参拝に訪れ、信仰心を実感できることを嬉しく思います」。参拝に訪れる人を見ることが宮司としての喜びであるという。神社を守るにあたって「氏子の方がたから崇敬をいただき、氏子の皆さんが幸福になってくれることが喜ばしいことです。そしてそのことで神社の発展に寄与できれば、神社を守るということに繋がると思います」と語ってくれた。

本殿脇にある天神地祇社（旧八幡宮）

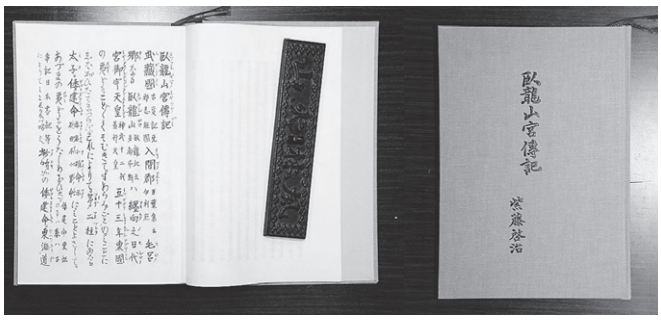
春の流鏑馬の変遷

かつて、出雲伊波比神社の流鏑馬は、旧暦8月15日に八幡宮に、旧暦9月29日に飛来大明神に奉納されていたことが文献でわかっている。八幡宮とは、本殿の脇に鎮座している社のことで、現在は、本殿に合祀されており、天神地祇社として鎮座している。また、飛来大明神とは現在の本殿にあたる。8月15日に行われていた八幡宮の流鏑馬は、明治20年代には一旦姿を消し、大正時代になって2月の八幡宮春の流鏑馬として復活し、昭和7年からは3月15日出雲伊波比神社の春祭の流鏑馬と変更された。その後昭和36年から昭和50年まで中断していたが、昭和51年に再開され、今では毎年3月第2日曜日へと変更された。

「春の流鏑馬の見所は、秋の流鏑馬とは内容が違い、小さな男の子が乗り子であること、そしてオカイドリが乗り子についていくところですね」と紫藤宮司は笑顔で語ってくれた。

「臥龍山宮傳記」

出雲伊波比神社には「臥龍山宮傳記」という書が伝わっている。これは文政8年（1825）に藤原朝臣義彦（斉藤義彦）によって著された神社の由緒を記した書である。そのなかに八幡宮の流鏑馬についての記述がある。毎年、8月15日に八幡宮で流鏑馬を奉納していることや、その内容として、的を三か所にたて鏑矢を射ると



「臥龍山宮傳記」（紫藤啓治氏編）

いったことが記されている。文政年間において、出雲伊波比神社の流鏑馬は年に2回行われていたことが「臥龍山宮傳記」をとおして読み取ることができる。

「オカイドリ」の説話

「オカイドリ」は乗り子を守る母親の象徴であるとされている。出雲伊波比神社には「品陀和気命（応神天皇）の御母、息長帯比売命（神功皇后）が臥龍山に鎮まる我が子を思い火となって飛んできた」という説話が残っている。「オカイドリ」が乗り子に付き従う詳しい意味は不明であるが、この説話は、3歳で即位したといわれる八幡宮の祭神である応神天皇を母宮である神功皇后がお守りしている姿を暗示しているともいわれている。

これからの流鏑馬

「流鏑馬は、毛呂山町に940年以上も脈々と続けられてきた伝統ある行事です。伝統行事を継続することは大変なことですが、伝統文化を継承する人が少なくなりつつあることは残念なことですね。この伝統が途絶えないように皆さんで協力していってもらえればありがたいと思っています」流鏑馬の継承について多少の不安を覚えているようだ。

また紫藤宮司は流鏑馬についてもっと広く知らしめることも必要だという。「町内在住の人でも流鏑馬のことを知らない人がいるのではないでしょうか。町外の人にだけでなく、町内の人にももっと流鏑馬に興味を持ってほしいと思います。また流鏑馬は、まだまだ全国的に知られていないですね。流鏑馬の知名度を上げることは毛呂山町の知名度を上げることに繋がると思います」。

これからのことについて、紫藤宮司は「流鏑馬祭りは、今や毛呂山町を代表する祭りであるといえるのではないでしょうか。そのような流鏑馬のある毛呂山町の神社に務められることを誇りに思い、これからも奉仕の気持ちを忘れずに務めて参りたいと考えています。そして今後も神と人との中取持として宮司という役職を粛々と務めていきたいと思います」と終始穏やかな表情で語ってくれた。

取材を終えて

地域の人たちの力によって支えられ、伝えられてきた流鏑馬祭りは、現在私たちの住む毛呂山町で最も代表的なお祭りであるといえます。この伝統的なお祭りを後世へ伝えていくことは現代を生きる私たちの使命であるともいえるのではないでしょうか。流鏑馬祭りに直接携わらなくとも、見にいくことで、また知ってもらおうとすることで、流鏑馬祭りの伝承に貢献できるはずです。

今年の春の流鏑馬は、3月14日に行われます。皆さんで誘い合わせて、見に行ってみてはいかがでしょうか。

【参考文献】
『臥龍山宮傳記』紫藤啓治編、『流鏑馬のきたみち―県内流鏑馬の分布と伝承―』二階堂実、『86毛呂の流鏑馬』埼玉県立民俗文化センター、『さきたま文庫65　出雲伊波比神社《毛呂山》』内野勝裕、『国指定重要文化財建造物　出雲伊波比神社本殿』宮司　紫藤啓治、『延喜式内出雲伊波比神社　古式流鏑馬祭』出雲伊波比神社社務所、『出雲伊波比神社由緒』出雲伊波比神社社務所、『出雲伊波比神社の「春の流鏑馬」』出雲伊波比神社社務所、『第1回特別展毛呂の流鏑馬』毛呂山町歴史民俗資料館、『第15回特別展やぶさめ紀行―毛呂の流鏑馬　児のやぶさめ―』毛呂山町歴史民俗資料館